

Title	Gawain-Poet の倫理
Author	吉田, 新吾
Citation	人文研究. 15 卷 3 号, p.177-188.
Issue Date	1964
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Gawain-Poet の倫理

吉田新吾

『清浄』 (Purity, Cleanness) 、 『忍耐』 (Patience) 、 『真珠』 (Pearl) 、 そして『サー・ガーウェインと緑の騎士』 (Sir Gawain and The Green Knight) の作者を総括的に Gawain-poet (制作 c. 1360-95) と呼ぶならば、 Gawain-poet を支える二つの大きな柱は、清浄と忍耐の倫理であるといえるであろう。清浄とは、あらゆる罪の穢れからの無垢、忍耐とは、神意への従順、諦念の意であり、いずれも、『忍耐』のブローグにもいう、キリストの山上の垂訓にある八つの幸福 (ast happens (the Beatitudes)) の中に含まれるものである。『清浄』と『忍耐』は、それぞれ清浄と忍耐の倫理を打出す姉妹篇として、中世の説教の域を出ず、『真珠』は、それら二つの倫理を綜合して、説教を珠玉の詩にまで昇華させ、『サー・ガーウェインと緑の騎士』は、円熟のうちに清浄、純潔の倫理、そして人間の完全の理想を掲げるロマンスである。そういう過程が、Gawain-poet の示す倫理的、芸術的、人間的発展の型であると見たい。そして、そういう倫理性をもって Gawain-poet が示すスペンサー、ミルトンとの親近性に注目したい。MS. の『真珠』、『清浄』、『忍耐』、『サー・ガーウェインと緑の騎士』という順に従わず、制作の年代、順序も不明のままに、この発展の型に即して、以下 Gawain-poet の倫理を考察することにする。

Ⅰ まず、『清浄』は、清浄、すなわち、罪の穢れからの無垢が、天国の幸に参ぜしめ、不浄、すなわち、罪の穢れが、神の怒りを招いて破滅に導くという説教である。心の清いものは、神を見る恵みを与えられる。王の子の婚姻の宴に招か

れるものは、聖日の身なりを整えたもののみである。天国に入ることを許されるものが、穢れなく清い行いのものに限られるということである。そして不浄が滅びに導くことを、詩人は三つの例話、旧約『創世記』と『ダニエル書』からのパラフレイズで実証する。ここでは、神が怒りと復讐と懲罰の神である。

「神は悪臭を放つ地獄のようにすべての悪を忌み憎む」²

まず、神はノアの洪水をもって、「肉なるものの穢れ」(Pe fylpe of Pe flesch)³を全世界から洗い去り、すべての生ける肉なるものを滅ぼす。次に、悪徳、殊に男色の町ソドム(Sodamas Sodom)とゴモラ(Gomorrie Gomorrah)を風と雨、火と硫黄で滅ぼし、地獄に吞ませて、「死海」に化せしめる。最後に、好色、驕慢であり、邪神、偶像を拝し、父ネビュカドネザー(Nabigo de Nozar Nebuchadnezzar)がイェルサレム攻囲によって獲た聖器を酒宴の用に供して神聖を冒瀆したバビロン王ベルシャザー(Baltazar Belshazzar)とその王国の滅亡を、鉛筆をもつ拳で壁に書かれた文字をもって警告し、予言者ダニエルの解説どおりに実現させる。それゆえ、詩人は勧めていたのである。

「主と愛をかわし、真に主を愛し、その親しい妻となろうとするものは、つねに真珠のように曇りなく磨かれたキリストにならない、自らを清くせよ」⁴

「たとえ地上に生きる間穢れた、泥まみれの人間であろうと、主は慈悲を賜う。たとえ汚辱に仕えたとしても、あなたに懺悔によって輝くであろう。そして悔改めによって真珠となるまで自らを清めることができるであろう」⁵

次に、『忍耐』もまた、説教である。忍耐が心を和らげ、悪と罪とを滅するということである。旧約『ヨナ書』のバラフレイズであって、予言者ヨナ(Jonas Jonah)を通して、神が忍耐を啓示するものである。すなわち、神の怒りと寛容、世界と万物の全知全能の創造主たる神の「力と慈悲と温和」を主題とする。⁶ここでも、神は怒りと復讐と正義の神であるが、ここでは、それにまして、慈悲と忍耐と寛容の神である。神がニネヴェ(Nynyue Nineveh)の悪に怒る。その滅亡を予言し戒めよという命に背いたヨナを怒り、その乗った船を大嵐に遭わせ、船員たちをしてヨナを海に投せしめ、鯨を

してその腹の穢れた臟腑の中に吞みこませる。しかし、三日三晩祈り続けたヨナを、神は鯨を吐いて陸上に吐き出させ、
を去って悔改めたニネヴェ人に怒りをやめ、ニネヴェを滅びから救うのである。そして最後に、ヨナに教を授け、
私がお前のよ

してその腹の穢れた臟腑の中に呑みこませる。しかし、三日三晩祈り続けたヨナを、神は鯨をして陸上に吐き出させ、罪を去って悔改めたニネヴェ人に怒りをやめ、ニネヴェを滅びから救うのである。そして最後に、ヨナに教えていう、

「『人々が私に向かい、来て、私を王と認め、私の言葉を信ずるのに、どうして怒ることができよう。私がお前のように性急ならば、禍が起るであろう。私がお前のように忍耐がなければ、栄えるものはごく少ないであろう。私はさほどきびしくはなく、柔和と思われるであろう。罰も内に慈悲がなければ行いたいからである。お前は怒ることなく、お前の道を行きなさい。苦しみに喜びにも、勇敢で忍耐強くありなさい。』」⁷

Ⅱ 『清浄』と『忍耐』のそれぞれを支える清浄と忍耐の倫理を綜合したものが、『真珠』である。そしてその真摯な倫理性、宗教性は、その芸術性——想像力の豊かさ、感覚美への感受性の鋭敏さ、作詩法の複雑、精妙さ——と相俟って、それをME詩にユニークなものにするのである。

清浄の靈気が、『真珠』に遍満している。まず、真珠のイメージが、全篇を一貫して清浄の象徴となる。真珠は、詩人が草叢に落して失った寶石であり、幼くしてなくした愛娘であり、娘の胸に輝いて天国の至福を象徴する「価高き真珠」であり、重複しつつ、清浄を象徴する。草叢に落ちて見えなくなった真珠は、詩人にとって、なくなった娘の象徴として、「わが穢れなき価高き真珠」⁸である。娘は「穢れなき真珠」⁹であり、その胸にある真珠も「穢れなき真珠」¹⁰であり、「穢れなく清らに澄み」¹¹、「子羊」はもちろん、「子羊」に従う群も、「新しきイエルサレム」も、穢れなきことはいうまでもない。「穢れなき」という意味の多様な表現が、いくど繰返されることであろう。 *wythouten spot, wythouten galle, wythouten wemme, wythouten blot, wythouten mote, wythouten flake* *hōhōhō maskellez, wemlelz, motelelz, unblemyst* とあり、*peche, moi, maskille, teche* をもたずというのである。そしてまた、清浄は光輝によって表現される。『真珠』全篇は、まぶしいばかりの光耀、さえわたる白光の透明、清澄の世界である。詩人のヴィジョンの全体に溢れる光輝の雰囲気、地上楽園が代表する。

As bornyst syluer Pe lef on slydez,

Pat Pike con trylle on vch a tynde.

Quen glem of glodez agaynz hem glydez,

Wyth schymeryng schene ful schrylle Fay schynde. 12

枝々に繁り震える木の葉は、磨いた銀のようにすれあい、

晴れわたる空の光に、目もくらむばかり燦然と輝いていた。

In Pe founce Fer stonden stonez stepe,

As glente Purz glas Pat glowed and glyzt,

As streamande sternez,quen stro'e-men slepe,

Staren in welkyn in wynter nyzt. 13

川底に輝く石は、玻璃越しに白くきらめく光のように、

地上の人の眠るとき冬の夜空に光り輝く星々のようであった。

また、『ヨハネ黙示録』¹⁴に従って描かれた『真珠』の天上の樂園、「新しきイエルサレム」が、光彩陸離として玲瓏の場

であることはいまでもない。都は悉く黄金、基礎の十二層はあらゆる種類の宝石より成り、垣は「光り輝く玻璃のよう

な碧玉」、¹⁵門は真珠であり、神の都は「太陽よりも明るく光り輝き」、¹⁶「すべての街々に光満ちて、日も月も要らず」、¹⁷

「透明、清澄、光を遮るものとなかった」。¹⁸

清浄が褒賞の恩寵にあずかると信ずるところに、『真珠』を支える清浄の倫理がある。清浄なものがすべて、天国における報酬として、「子羊」の花嫁、愛人、天国の女王となり、永遠の生命を与えられて神の子となると信ずるのである。

『マタイ伝福音書』に、宝石商が全財産を投じて買うという「価高き真珠」、¹⁹天国とその至福の象徴を、キリストの花嫁の

しるしとして胸に置かれるというのである。穢れあるものは天国に入らず、穢れなきものは天国の門はすくなく開く。後から生かされて全然穢れを知らぬものは、罪を悔改めたものよりも悪徳が多い。幼児のように天国に入るべきである。後から

しるしとして胸に置かれるというのである。穢れあるものは天国に入れず、穢れなきものに天国の門はすぐに開く。そして生まれて全然穢れを知らぬものは、罪を悔改めたものよりも恩寵が多い。幼児のように天国に入るべきである。後から来て働いたものの方が、先のもので早く賃銀を支払われるという葡萄園の寓話のあるゆえんであり、二歳にも満たずに死んだ娘が、キリストの妻、天国の女王となつてゐるゆえんである。穢れない霊は、性に関係なく、すべて「子羊」の妻となり、天国の女王、王となる。そのような、清浄、純潔なものの天国におけるキリストとの霊的結婚は、『ヨハネ黙示録』の中で、「子羊」の花嫁たちが婚姻の支度を整えて、婚姻の歌を歌うところに由来するものである。

「われ見しに、視よ、羔羊シオンの山に立ちたもう。十四万四千の人これと偕に居り、その額には羔羊の名および羔羊の父の名記しあり。われ天よりの声を聞けり、多くの水の音のごとく、大なる雷霆の声のごとし。わが聞きし此の声は、「とひき彈琴者の立琴を弾く音のごとし。かれら新しき歌を御座の前および四つの活物と長老等との前にて歌う。この歌は地より贖われたる十四万四千人の他は誰も学びうる者なかりき。彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者なり、何処に「いすこまれ羔羊の往き給うところに随う。彼らは人の中より贖われて神と羔羊とのために初穂となれり。その口に虚偽なし、彼らは瑕なき者なり。」²¹

そのように、清浄、純潔な「子羊」の花嫁たち、純白の衣、真珠の冠、胸飾りをつけた幾十万の処女たちが、「子羊」を讃える歓喜の歌を地獄に届くほどに歌い、「玻璃のように輝く黄金の街」²²を玉座に向かつて行進するさまを望見して、『真珠』の詩人の心が歓喜に打ち震える。

「その貴い幻に驚き、私は目のくらんだうずらのように立ちすくみ、憩いも苦しみも感ぜず、清らかな輝きに恍惚となつていた。」²³

「子羊」を眺め、受難と贖罪における「子羊」を観想して、詩人は歓喜と憧憬に満たされる。

「『子羊』を眺めて、心に歓喜と驚異がこみ上げてきた。」²⁴

川を渡って娘のもとへ行きたいという狂おしい衝動に駆られる。

「歓喜目と耳より入り、人の子の心は猛り狂うた。」²⁵

以上からして、『真珠』は、愛娘の死に対する嘆きを契機としつつ、清浄、純潔なもの天国における神秘的結婚の啓示に生命を鼓吹されたものというべきであろう。この霊的結婚は、『真珠』の詩人にとって、そしてまた、『ゴーマス』(A Mask (Comus))、『リシダス』(Lycidas)、『デイモン墓碑銘』(Epitaphium Damonis)における「ルトン」にとって、ヴァイタルな救済の問題であったのである。

次に、『真珠』を支えるいま一つの倫理は、忍耐の倫理である。苦悩に対決するとき、忍耐をもって情熱を統御し、神意に随順することである。苦悩を経て従順を学びとるところに救済があるとするのである。『真珠』は、悲嘆の情熱と理性、信仰の対立する場である。悲嘆が深刻に吐露される。最愛の娘を失って、詩人は「悲しみの牢」²⁷にある。かつて「わが幸」²⁸、いま「わが悲しみ」²⁸として、娘が詩人の全宇宙なのである。

「胸はただ悲しみに湧き立ち燃ゆる。」²⁹

「泉から湧き出る水のような悲しみに私の心はさいなまされた。」³⁰

そういう悲嘆と不信心の父に、娘が理性と神の智慧の具現として、神意への従順を教える。神を愛し、神の定めるところに耐えるべきである。

「主を咎め、絶えず非難しても、主は一步も道から逸れようとはされない。」³¹

「悲しみ、狂い、嘆き、隠しても、すべて神の定めのみである。」³²

高慢は天国で忌み憎まれる。

「まったき柔和のうちに深く敬虔であるべきである。」³³

そして詩人は、娘が「新しきイエルサレム」の栄光の中に、「子羊」の花嫁、天国の女王として住む至福のさまを啓示さ

れて、法悦に浸り、夢覚めて、神意への従順という悟りに到達し、心の平安をかちうる。

「主よ、あなたにあらがひ、御心に逆らうのは、狂気の沙汰です。」³⁴

「それで私はそれ〔私の真珠〕をキリストの貴い祝福と私の祝福のうちに神に委ねた。」³⁵

そして『真珠』は、

「キリストがわれらを御心に叶うその家の僕、価高き真珠となることを許したまわんことを。」³⁶
という祈りで終るのである。

以上からして、『真珠』は、エレジの枠組をもって清浄と忍耐の倫理を打出す救済の説教と解釈さるべきであろう。ところで、この作品の解釈は、エレジ対アレゴリーないしシンボリズムという点をめぐって論争の種となったものである。まず、伝統的、正統的というべき解釈は、モリスに始まるテクスト編者たち、ゴランツ、オズグッド、ゴードンなど³⁷を主として、『真珠』を個人的、自伝的エレジとする説である。それに挑戦して、それを否認し、真珠を「処女の清浄」(the purity of the maiden)、⁴¹「純潔な処女性」(clean maidenhood)⁴²の純粋な象徴、寓意とする異説を立てて、波紋を投じたのが、スコフィールドであった。彼はコルトンの激しい反論の的となったが、以後に現われるものもろもの象徴説への刺激となった。すなわち、真珠が象徴するとされるものは、ギャレット⁴³では聖餐(Eucharist)、フレッチャー⁴⁴は無垢(innocence)、マデリーヴァ⁴⁵では詩人が体験した魂の完全な状態である霊的乾燥(spiritual dryness)という具合である。また、グリーンは、『真珠』をフィクションをもって恩寵を説く神学論⁴⁶といい、カーギルとシュローチは、詩人自身⁴⁸の娘ではないが実在の娘についてのエレジ⁴⁷といい、エヴァレットは、エレジとアレゴリーの要素をもつ説教というところで、個人的エレジではなくて、純粋な象徴的アレゴリーとするのは、悲嘆の真摯さを無視するものである。結局、『真珠』は、エレジの枠組で、そして真珠に宝石、娘、天国、清浄を表現、象徴させつつ、清浄が天国における霊的結婚の

恩寵にあずかるという清浄の倫理と、懊悩から諦念に達するという忍耐の倫理を打出す人間の救済についての説教であると見なさるべきであろう。

Ⅲ 『清浄』で不浄の懲罰として、そして『真珠』で清浄なもの天上における靈的結婚として展開された清浄の倫理を、愛について純潔の試練として正面に押出すものが、『サー・ガウウェインと緑の騎士』である。

『サー・ガウウェインと緑の騎士』は、すぐれて倫理的である。もっとも、物語の興味がかかっているのは、ロマンスとしての主題、すなわち、「緑の騎士」のガウウェインに対する首の斬りあいへの挑戦と、城主の奥方のガウウェインに対する誘惑とにあるが。それらは、普通ロマンスが成立するための冒険と恋愛の要素である。挑戦はケルト的な妖精の魔法のわざである。キトレッジによれば、⁴⁹首を斬られることによって魔法の呪縛から解放されるという型の物語に由来する。ガウウェインの斬り落した「緑の騎士」の首がもとどおりにつき、「緑の騎士」が城主に姿を変える。緑は妖精の色であり、森林、草木の精を暗示する。緑の帯は不死身の魔力を与える護符である。そして挑戦のプロットの原動力が、妖精モーガン (Morgane la Faye (Morgan le Fay)) である。このような超自然的驚異の世界が、「緑の騎士」の「頭が首から落ちて、地にめりこみ、ごろごろころがってゆくのを多くの人が足蹴にした。」⁵⁰というような描写のリアリズムによって、非現実性の不合理からかなり救われている。次に、誘惑は宮廷的恋愛のコンヴェンションに依拠しつつ、宮廷的な優雅、洗練を展開する。以上のような挑戦と誘惑の主題の調和に、『サー・ガウウェインと緑の騎士』の興味が依存するのであるが、それにもかかわらず、これはきわめて倫理的なロマンスである。後期の作とする推定を肯定させるほどに、円熟、静穏の詩境にふさわしく、おしつけがましい説教臭からは免れているが、これまた、モラリスト詩人の強烈な倫理性を打出しているのである。

『サー・ガウウェインと緑の騎士』は、人間の理想、完全な人間の理念として、キリスト教に統御される騎士道倫理を掲げる。真珠のように完全無欠な騎士、人間 (Le faulxeste freke)⁵¹としてガウウェインを描き上げる。彼の盾に描かれた五

線の星 (fe pentangel)⁵²は、「終りなき結び目」として、完全の、そして彼が具現する完全の象徴である。すなわち、五感、五指において申し分なく、十字架の上でキリストが蒙った五つの傷を信じ、愛胎告知、キリストの降誕と復活と昇天、彼女自身の昇天という聖母マリアの五つの喜びから勇気をふるい起し、寛大 (franchyse)、隣人愛 (felaschyp)、清浄 (clannes)、礼節 (cortaysye)、敬虔 (pie)⁵³という五つの徳を兼備しているということである。肉体的、倫理的、宗教的完全の意である。サヴェヅジによれば、五線の星は、もとピタゴラス (Pythagoras) において完全、統一の象徴であったが、後にキリストの完全を象徴する三博士の星 (the Star of the Magi) となり、いま『サー・ガウウェインと緑の騎士』で、そして中世ロマンスのうちここだけで、ガウウェインの人間としての完全を象徴する紋章となるのである。

『サー・ガウウェインと緑の騎士』は、人間の完全が徳の試練を通して到達されるとする倫理的ロマンスである。その点において、スペンサーの『神仙女王』 (The Faerie Queene) の、そしてより倫理的な先蹤といえるであろう。まず、勇気の試練が、相手の首を斬り、一年後に自分が首を斬られるという挑戦に応ずることにある。次に、誠実が、挑戦の約束と、毎日の獲物を交換するという城主との約束とについて、そして誘惑によって設定される不倫の関係において、また客人が主人に対して負う義務として試される。そして、誘惑に抵抗する場に、礼節の試練がある。これらの騎士道的徳の試練に、ガウウェインは堪える。毅然として死地に赴き、交換の約束における誠実にいくらか欠ける結果となるが、依然として「言語もつとも誠実な騎士」⁵⁴に変わりなく、礼節の権化、「礼節の父」⁵⁵である。

しかし、『サー・ガウウェインと緑の騎士』が要求する中心的な徳は、勇氣、誠実、礼節ではなくて、純潔、清浄なのである。清浄とは、あらゆる罪の穢れから無垢であること、純潔とは、宮廷的恋愛の不倫と官能の情熱から免れることであり、清浄の根本的なものである。『サー・ガウウェインと緑の騎士』の全体のプロットの中で、挑戦は枠にすぎず、誘惑が中心となっているのであるが、それは、誘惑によって試練される純潔、清浄が、それほど重要な徳と見なされているということなのである。さて、誘惑は、求愛が婦人の方からしかかけられるという反則はあるが、原則的には、宮廷的恋愛の

コンヴェンションに従って行われる。奥方によれば、騎士道の精粹は愛と武勇であり、武勇は愛のためである。ガーウェインはしばしば奥方の僕、彼女の騎士であることを誓う。「サー・ガーウェインと緑の騎士」の作者は、フランスのロマンスを中心とする中世詩が理想とした慇懃、優雅を体得しており、『薔薇物語』を熟知していたのである。しかし、誘惑は宮廷的恋愛の不倫と官能の情熱の否定に終る。ガーウェインは、愛が騎士道的美徳の源泉であるとする宮廷的恋愛の觀念に従わない。奥方の求愛に応ずることを神への罪と考える。聖母と神への祈りによって危機を脱する。結局、純潔、清浄の試練に堪えるのである。宮廷的恋愛に対するキリスト教倫理の勝利である。しかし、ガーウェインは、無傷ではない。奥方の緑の帯をもらうという過失を犯すのである。その前からすでに情熱に圧倒されかけて、危機に陥っている。

「熱く燃え上る歓喜が、彼の心を熱した。」⁵⁶

「聖母マリアが彼女の騎士に心をおかけたまわなかったならば、二人の間には大いなる危険があった。」⁵⁷

そしてガーウェインは、奥方の贈物を「愛のしるし」(Infance, druyve)⁵⁸として受取る。官能の誘惑への傾斜の紛れもない証拠である。また、ガーウェインは、不死身を保証するものとして緑の帯を受取る。そこに臆病と食欲の罪が生まれる。

さらに、ガーウェインは、緑の帯を隠しもつ。それは、城主との交換の約束に対する不誠実の罪である。さらに、夫に秘密にせよという奥方の言葉、すなわち、女の命に従うことであり、「愛にほうけ」、「女の奸計」に欺かれたアダムやソロモンやサムスンやダヴィデの轍を踏むことである。⁵⁹結局、純潔の試練の意味するところは、官能の情熱がほとんど不可抗的な魔力をもって人間を誘惑、脅威し、ほとんど完全な人間ガーウェインすらも危機に陥れるものであり、肉体が穢れやすく、脆いという洞察であり、そのような情熱の危険に抵抗することによって、純潔、清浄の徳を守らねばならないということである。それが、「サー・ガーウェインと緑の騎士」を支える純潔、清浄の倫理である。そしてまた、ミルトン生涯の問題なのである。

『サー・ガーウェインと緑の騎士』が騎士道の理想の具現者、完全な人間としてガーウェインに要求する究極の徳は、

宗教的敬虔である。人間にはつねに試練があり、絶えざる自己鍛練があり、究極に神の庇護があると詩人は信ずるのである。ガーウェインは、神を人間と世界の創造主と信じ、神に祈り、神に仕え、神に委ね、神に謝し、神意に従順であり、聖母の像を楯に拙いた彼女の騎士である。神への罪を恐れ、神に祈ることによって、そして聖母の加護によって、誘惑の危機から救われる。こうしてガーウェインは、純潔、清浄の騎士、敬虔なキリスト者に描き上げられている。人間完成の仕上げが、純潔、清浄、そして敬虔によってなされるということである。キリスト教倫理の勝利である。

『サー・ガーウェインと緑の騎士』のガーウェインは、マロリーのラーンスロット、チョーサーのトロイルスと好対照をなす。後の二人は、ガーウェインと同じく、騎士道の理想の具現者であるが、ガーウェインと異なり、愛に憑かれ、愛に酔い、愛に悩んだ宮廷的恋愛の理想的愛人であるからである。彼らの生涯は、世俗的愛への陶醉のそれである。世を捨てて隠者となったラーンスロットの余生は、宗教への逃避、敗北であり、愛人に背かれたトロイルスの救いは、天上にしかない。結局、『サー・ガーウェインと緑の騎士』のモラルは、騎士道倫理がキリスト教に統御されるときに、初めて人間の完全が到達されるという確信なのであった。

注

- | | |
|----|--|
| 1 | <i>Patience</i> , 11 ff. テクストは <i>Patience</i> , ed. I. Gollancz, Oxford, 1913 (Select Early English Poems) による。 |
| 2 | <i>Purity</i> , 577. テクストは <i>Cleanness</i> , ed. I. Gollancz, Oxford, 1921 (Select Early English Poems) による。 |
| 3 | <i>Ibid.</i> , 547. 4 <i>Ibid.</i> , 1065-68. 5 <i>Ibid.</i> , 1113-16. 6 <i>Patience</i> , 295. 7 <i>Ibid.</i> , 518-23. |
| 8 | <i>Pearl</i> , 48. テクストは <i>Pearl</i> , ed. E. V. Gordon, Oxford, 1953 による。 |
| 11 | <i>Ibid.</i> , 737. 12 <i>Ibid.</i> , 77-80. 13 <i>Ibid.</i> , 113-16. 14 <i>Revelation</i> , xxi, xxii. 15 <i>Pearl</i> , 1018. |
| 16 | <i>Ibid.</i> , 982. 17 <i>Ibid.</i> , 1043-44. 18 <i>Ibid.</i> , 1050. 19 <i>Matthew</i> , xiii, 45-46. 20 <i>Pearl</i> , 497-588. |

- (< Matthew, xx) 21 *Revelation*, xiv. 1-5. Cf. *ibid.*, xix. 7, 9. 22 *Pearl*, 1106. 23 *Ibid.*, 1085-88.
- 24 *Ibid.*, 1129-30. 25 *Ibid.*, 1153-54. 26 拙論「マハトンの『グリンデの歌』」(『人文研究』第十一卷第六号、大阪市立大学文学会、昭和三十五年六月) 参照。 27 *Pearl*, 1187. 28 *Ibid.*, 373. 29 *Ibid.*, 18. 30 *Ibid.*, 364-65.
- 31 *Ibid.*, 349-50. 32 *Ibid.*, 359-60. 33 *Ibid.*, 406. 34 *Ibid.*, 1199-1200. 35 *Ibid.*, 1207-8.
- 36 *Ibid.*, 1211-12. 37 *Early English Alliterative Poems*, ed. R. Morris, EETS OS 1, 1864, Preface.
- 38 *Pearl*, ed. and trans. I. Gollancz, London, 1891, 1921, Introduction. I. Gollancz. "Pearl, Cleanness, Patience and Sir Gawayne," *The Cambridge History of English Literature*, Cambridge, 1907, Vol. I, pp. 320-21, 323.
- 39 *The Pearl*, ed. C. G. Osgood, Boston and London, 1906, Introduction. 40 *Pearl*, ed. E. V. Gordon, Oxford, 1953, Introduction. 41 W. H. Schofield, "The Nature and Fabric of *The Pearl*," *MLA*, XIX, 1904, pp. 154-215.
- 42 G. G. Coulton, "In Defence of 'Pearl'," *The Modern Language Review*, Vol. II, 1906, pp. 39-43.
- 43 R. M. Garrett, *The Pearl: an Interpretation*, Seattle, 1918. 44 J. B. Fletcher, "The Allegory of the Pearl," *The Journal of English and Germanic Philology*, xx, 1921, pp. 1-21. 45 M. Madeleva, *Pearl: A Study in Spiritual Dryness*, New York, 1925. 46 W. K. Greene, "The Pearl—A New Interpretation," *MLA*, XL, 1925, pp. 814-27.
- 47 O. Cargill and M. Schlauch, "The Pearl and its Jeweler," *PMLA*, XLIII, 1928, pp. 105-23. 48 D. Everett, *Essays on Middle English Literature*, Oxford, 1955, pp. 85-96. 49 G. L. Kittredge, *A Study of Gawain and the Green Knight*, Gloucester, Mass., 1916. 50 *Sir Gawain and The Green Knight*, 427-28. ホノクニシテ *Sir Gawain and The Green Knight*, ed. I. Gollancz, EETS OS 210, 1940 22-23. 51 *Ibid.*, 2363-65. 52 *Ibid.*, 619 ff.
- 53 H. L. Savage, *The GAWAIN-Poet*, The University of North Carolina Press, 1956, pp. 158-68.
- 54 *Sir Gawain and The Green Knight*, 638. 55 *Ibid.*, 919. 56 *Ibid.*, 1762. 57 *Ibid.*, 1768-69.
- 58 *Ibid.*, 1874, 2438; 2033. 59 *Ibid.*, 2414-28.